研究ノート

「学生FDサミット2017春」参加報告と学生への効果

草山　洋平

はじめに

FD活動の一部に学生スタッフが関わって行われる学生参画型FD，いわゆる「学生FD」という活動がある。立命館大学より始まったこの取り組みは全国の大学に普及し，2009年には「学生FDサミット」が開催されるようになった。本研究ノートは本学の有志学生と共に参加した「学生FDサミット2017春」の内容と，参加した学生が何を得ることができたのかを報告するものである。

「学生FD」と「学生FDサミット」

大学での学生支援に関する考え方が大きな転換を迎えた契機となったのが，2000年に発表された文部省高等教育局の報告書「大学における学生生活の充実方策について―学生の立場に立った大学作りを目指して―」（通称：廣中レポート）と，2007年に発表された独立行政法人日本学生支援機構の報告書である「大学における学生相談体制の充実方策について―『総合的な学生支援』と『専門的な学生相談』の『連携・協働』―」（通称：苫米地レポート）である。この二つのレポートによって示された方向性と構想が，その後の学生支援に対する考え方の基本となり，多くの大学において学生支援態勢の再編が行なわれた。この学生支援は学生相談にも影響した。カウンセラーの斎藤憲司は「廣中レポート」の最大の功績を，これまでの大学は「教員中心」であったと総括し，「学生中心」に転換すべきという理念を明確に打ち出したこと，さらに「学生相談」を「大学教育の一環」と捉え直したことだとしている。そして，「苫米地レポート」については，「廣中レポート」の理念をより実際的な提言にまとめるべく作成され，“すべての教職員”と“学生相談の専門家であるカウンセラー”との“連携・協働”によって学生支援は達成されることが強調されるとともに，「日常的学生支援」，「制度化された学生

支援」,「専門的学生支援」の三種によって構成される「三階層モデル」[i)] を提示し，学生相談と学生支援体制の充実の方向性を明示しことだとしている。（斎藤2011）

このような，大学における学生支援態勢の再編が注目されるようになる中で立命館大学で「学生FD」が創設される。尚，大学における学生支援態勢の再編については，欧米の教育史から論じられたものがあるため，ここでは割愛し，[ii)]「学生FD」の創設への経緯をまとめることにとどめておく。

立命館大学では1970年代には自治会組織による新入生支援活動があった。1998年に大学教育開発・支援センターが設置されたが，この時点では当センターのFD活動と学生活動の間に関係はなかった。そこから，2004年に「授業を良くするために教員と受講生をサポートする教育サポーター（ES：Educational Supporter）という学生スタッフが創設された。さらに「授業改善の支援に向けた調査・検討ワーキング」を設置し，教員の委員だけでなく，学生と職員メンバーを公募した。これにより，FD活動のマスタープラン作りに発展した。その課題は，１．立命館大学におけるFD活動の定義の明確化，２．立命館大学におけるFD活動の整理と大系化，３．大学教育開発・支援センター主催のFD活動の中期目標の策定，４．FD活動を企画・運営する人材の育成，であった。これらの課題は立命館大学のFD活動の定義にかかるものであり，最終的にはカリキュラムや個々の授業に関して，教員が職員と協働し，学生の参加を得て組織的な研究・研修を推進するとともに，妥当性・有効性を継続的に検証する活動だとしている。

立命館大学におけるFDの定義の特色として「学生の参画を得て」という文言が入っている。検討ワーキングに応募してきた学生は,「授業改善に向けた学生ワーキング」として独自のミーティングをも開始した。更に，授業改善のための学生ヒアリングや学生スタッフの冊子作りと発信も実行された。冊子の内容は「学生スタッフが自分たちの受けた授業の中から選んだ印象に残った授業」であり，学生たちがどのような授業を望んでいるかは，そこからうかがい知ることができ，更に教員の授業に対する考え方や様々な授業の工夫の中から，参考になるヒントがあるとした。こうした活動とあわせて，他大学と交流をする中で学生FDサミットは作られていった。

このように見ると学生FDの活動は教員が職員と協働するなかに学生の参画を得たうえで，学生も自ら活動を工夫する構図が見えてくる。また「学生FD」や,「学生FDサミット」で取り上げられる問いの根幹は授業を良くすることであると言えるだろう。

サミット参加の行程

３月２日	６：15	東京発（新幹線）
	11：25	湯田温泉駅着（専用バスにて移動）
	11：40	山口大学着

「学生FD第一世代トーク」登壇者３人目より聴講
20：00　情報交換会終了
22：30　引率した学生との１日目振り返り
23：30　振り返り終了
３月３日　９：30　山口大学着
16：15　山口大学発
22：15　東京着

「学生FDサミット2017春」

サミットは2017年３月２日・３日の２日間，山口大学を会場として行われた。テーマを「Borderless Campus ～学びのフィールドはどこにある？～」として，学びの多様性に焦点を当て，「発見し・はぐくみ・かたちにする」という活動を通して，各大学オリジナルな学生FDを考えることを目指した。

参加者は両日とも，サミットの運営者によって決められた１組６人を基本としたグループに分けられた。このグループは，所属する大学や，教員，職員，学生といった立場のすべてを交ぜて振り分けられた。また，１日目と２日目とではグループのメンバーは替えられた。

サミット１日目

47大学221名の教職員と学生が参加した[iii]。

午前の部　【発見する】学生FD第一世代トーク「とどけ熱き心」

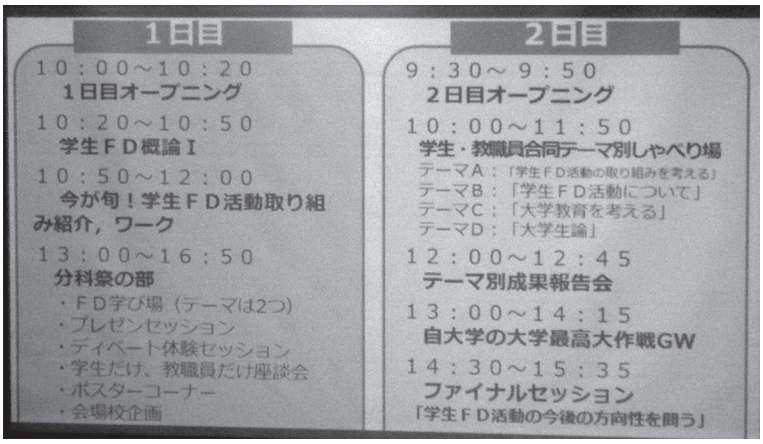
学生FDサミット創設期に活躍していた４名から，学生当時にどのようなことを心がけて活動していたのかという題目により体験談が話された。

①横浜国立大学特任教員　曽根健吾氏（元東洋大学　学生FDスタッフ）

FDサミットの開催を通して他校との連携と，相互刺激の循環に力を入れた。また関東連合を立ち上げた。その過程で特に力を注いだのが以下の４点である。

１．効率的な情報収集（各大学のFD組織の在り方として，学生スタッフやピア・サポーターなど活動の幅に差があることに配慮し，各々の効率的な情報収集に力を入れた）
２．学生，教員，職員それぞれの意識改革
３．ネットワークや各大学で用いる方法を自大学へもってかえること（おみやげづくり）
４．しゃべり場最前線の構築（成果物づくり）

これらを通して，情報収集から意識改革，そして各大学での活動を活性化させることを試みた。



（曽根氏が学生当時に手掛けたサミットのプログラム）

また，特徴的な点として「分科祭の部」について説明された。講師を呼んで学び場を設けたり，学生だけ，教員だけの座談会を開いたりした。会場校企画では認証評価に関わる団体の職員に来てもらい話を聞いた。

②山口大学COC＋事業推進本部コーディネーター　山下貴弘（元追手門学院大学学生FDスタッフ）

2012年追手門学院サミットに関わった話がされた。追手門らしいサミットをつくろうという想いをかかげ，２日間の合宿で，自分たちがどんなことをしたいのかをメンバーで話し合った。自分たちが何をしたいのか，どうするべきかといった課題，また「こんなサミットは嫌だ」といった話題や，お土産を持って帰ってほしい，サミットの位置づけって何だろうといったことを話し合った。それらをまとめた結果，「自分たちで何かをつくろう」という意見となり中華料理を作ることとなった。これは学生と教員のみでなく，主に職員にテーマを与えてプログラムを作っていった。そのため，分科会も職員に特化したプログラムも作成した。

午後の部　【はぐくむ】分科会セッション「山大春の陣」

「学びの場はどこにあるのか」という問いが，学生の寸劇を交えて提示され，参加者はグループワークによって，この問いに取り組んだ。取り組みの手法としてゾグソー法が用いられ，「教室内の学び」「教室外の学び」「学びのスイッチ」（教室の内外を使い分ける）といった３会場が設けられ，各グループより２名づつ，分科会に参加し，分科会ごとに持ち寄った結論を共有した。

筆者の参加した「教室内の学び」では，下関市立大学の学生FD委員会が行なう「学生発案型の学び」の紹介と，「教室内の学び」の位置づけについての発表がされた。

「学生発案型の学び」とは，学生FD委員会に所属する学生が，一般学生（ママ）に対しオリジナル授業を行なうというものである。この授業は単位認定されず，企画は教員と連携してたてられる。授業の内容は教員とFD委員会で決定されるというものである。これまでの授業内容の例として，「森邦相談室」や「アルバイト論」といった授業が紹介された。「森邦相談室」とは，行動経済学を研究する教員を講師として，どうしたら恋人ができるかといった身近な相談に対し，行動経済学を通して解決しようとした授業である。また，「アルバイト論」は，正課授業である「キャリアデザイン」の一環として，アルバイトの必要性やアルバイトで得られるものについて講義した授業である。

これらの活動により学生FD委員会に所属する学生が学んだ点は以下の４点である。１．人に伝えるためには学ぶ必要がある。（学ぶ意欲の向上）２．受講者側のことを考える。（視野が広くなった）３．学生の興味を引くための工夫を試行錯誤（授業づくりの大変さを体感）４．教員との連携（学生に興味がある教員に多いことに気づいた）

下関市立大学からは，こうした授業作成の一助として即時集計アプリである「Clica」も紹介された。

そのうえで，「学生と教員が相互交流するためにできることは何か？」という問いが出された。この問いへのアプローチは再編されたグループ毎に検討と発表が行われた。発表された内容の一部を挙げれば，「教員へ質問に行く」「教員と学生があだ名で呼び合う」「学生主導でバーベキューなどの食事会をする」「挨拶運動や運動会を開く」といった，学生目線での意見が見られた。また，既に大学で行っている事例として冊子にて教員を紹介する，「教員紹介リレー」[iv] といったものも挙げられた。

総括として，学びの場を教室の内と外のどちらにするかといった問いに対する解答は，ファシリテートした学生たちでも結論づけることができないため，本サミットにおいては綱引きで決着がつけられた。

サミット２日目

43大学222名の教職員と学生が参加した[v]。

【かたちにする】グループワークセッション・オリエンテーション

１日目の活動をふりかえり，今後の学生の学びについて，私たち（参加者）は何ができるのだろうかという問いのもと，各自の大学に持ち帰ることができるサミットについて議論された。これは１日目とは異なるグループに編成されて，グループワークを通して行われた。

各グループから発表された意見のなかには，「教員・職員・学生で語り合う，大学におけるやりがい」や「立場が入れ替わったらやりたいこと」といったものがあった。「大学におけるやりがい」は，教員も職員も学生も，各々が何らかの夢や希望を大学に抱いているであろうという想定から，その夢を共有し，実現すべく話し合う場を設けようと

いう企画であった。また「立場が入れ替わったらやりたいこと」は，もしも自分が他大学に行ったらどうなるかといった，他者の立場から考えたことを共有しようという企画であった。

参加した学生が得られたもの

学生FDサミットに参加した本学の学生の感想は，「差がない」ということであった。具体的には，多くの大学が参加する学生FDサミットには，自らと比較し劣等感をもっていた大学も参加していた。しかし，そのような大学の学生と一緒に行動してみると，自分たちでも考えれば言えそうな意見が多いと感じた。そのため，大学のランクによる「差」をあまり感じなくなった。

また，それと同時に，わずかな学年の差で話し方などの技術が異なることに気が付いた。発表経験をつむことで技術は磨くことが出来るという自信が生まれたとのことであった。

これらの報告は本学の学生のある種の成功体験と言えるだろう。学外の学生と協働することにより，自らかけていた制限を払拭するきっかけが作れたのだと言える。

さらに，組織の活動範囲や継続性を意識し，メンバーの募集に関わる悩みもっていたが，大学内で同じ志をもつメンバーを集めることに苦労をしているという，組織としての悩みをどの大学も抱えていることに「差がない」と感じたようだ。

また，山口県という遠方に赴いたためか，普段では気が付かない範囲にまで意識が向いたようである。有志学生の報告によれば，サミットに合わせてＪＲの車両が増設されたことに，地域との連携がとれているのだと感動したのだそうだ。また，電車の待ち時間に，駅に隣接した足湯に浸かっていたところ，現地の人から山口大学の評判を聞いたそうだ。大学が地域と良好な関係を築いていることに大変感銘を受けたようだ。

学生FDサミットからみえてきたもの

「学生FDサミット」を表面的にみれば，「学生らしい」場面もよく目にした。しかし，２日間という長時間を学生の企画によって進行させていくことを考えれば，その実行性は並大抵のものではないだろう。

「学生FDサミット2017春」を振り返ると，過去のサミットとは違った取り組みを心がけたことがわかる。１日目午前の部【発見する】の曽根や山下の話によれば、当時のサミットでは「座談会」や「お土産つくり（情報を大学に持って帰る）」といった、意見交換をする場を提供することに力を注いでいたように思う。これらを振り返ったうえで、１日目午後の部【はぐくむ】において提示された「学ぶ場はどこにあるか」という問い

は、「教室外での学び」という，授業に特化しながらも学生と教員だけでは解決できない側面を考えさせる、学生FDらしい問題提起であったと思う。

【はぐくむ】の分科会プログラムにて，「学生と教員が相互交流するためにできることは何か？」という議論が投げかけられた。そこで提案された意見は【資料】として本報告の末尾に付しておくが，違和感を覚える提案も少なからずあった。この違和感が大学と学生との「差」であるならば，相互の歩み寄りがなければ解決が見えてこない。多彩な意見が出たことについて，今回のサミットに参加していた学生たちが，実に多様な所属から参加していたことを報告したい。懇親会にて話を聞くことができた学生たちのうち，中京大学や広島経済大学の学生は「学生FDスタッフ」や「学生FDプロジェクト」といった所属をもっていた。一方，島根県立大学の学生はボランティアサークルに所属しており，FD以外の活動もするのだという。また，本学の場合も含めて，学生が個別に興味関心をもち，所属はないが参加したというケースも少なくなかった。

このような場合，ピア・サポーターと学生FDにどのような違いがあるのかわからなくなってくる。これは「学生参画型」という言葉が広く曖昧に浸透していることが要因であるように思う。

本報告のまとめにかえて，ピア・サポーターと学生FDに違いについて触れておきたい。

2008年に改訂された大学設置基準ではFDの義務化が盛り込まれていた。しかし，2008年４月に中央教育審議会から出された「学士課程教育の構築に向けて（審議まとめ）」ではFDを教員団の職能開発とし，組織的で日常的な教育改善活動であると位置づけている。しかし，このどちらの定義にも学生が参画する意味合いは見られない。これについて沖裕貴は，立命館大学のピア・サポートには「支援する対象へのサービスの充実」，「ピア・サポーター自身の学びの深化と成長」，「業務を通じての教育改善への貢献」の３点の特色があるとしている。一方，学生FDについては，木野茂が「学生FD（スタッフ）は学生自らの意思と主体性のもとにすすめられることが基本であり，大学のFD企画への動員や教員側からの方針が与えられるのではなく，あくまで学生の視点からの活動を保証しなければならない」（木野2012）と述べている。木野の定義を受けつつ，沖裕貴はピア・サポート・プログラムと学生参画型FD（学生FD活動）の違いについて，ピア・サポーターは仲間（受験生や大学を来訪する部外者を含む）を対象とするのに対し，学生FDスタッフは教職員もしくは大学そのものを対象とする点であるとする。さらに，学生FDスタッフは「学生でありながらその分野に関してより深い研鑽を積み，理解力や提案力を持っている」という意味での「専門性」をもつものだとしている。つまり，学生FDは大学教育に関わる専門性を追求するという意味で，ピア・サポーターとは区別されると言える。

おわりにかえて

「学生FDサミット2017春」の口頭での報告は，有志学生から学長やFD委員長に向けて既に行なった。その際に，学長より「学生FDサミット」で見てきたもの，学んだものが，既に本学にあるかどうかも確認して欲しいという宿題をいただいた。本研究ノートでは言及することが出来なかったが，学生FDの創設過程で行なわれた「しゃべり場」や「外部講師による講演」など関連すると思われるものがあると考えている。このことについては次の機会に報告することとし，時間の都合上ここで擱筆する。

注

ⅰ）斎藤の言う「三階層モデル」の詳細は次の通りである。「日常的学生支援」とは，教職員が学習指導や窓口業務等において自然なかたちで行う成長支援，「制度化された学生支援」とは，クラス担任や何でも相談窓口等の役割・機能を担った教職員による支援，「専門的学生支援」とは，より困難な課題が生じた際に学生相談等の諸機関によって行われる専門的な支援を指す。

ⅱ）本報告の執筆に当たり，木野茂「学生主体の教育改善活動「学生FD」」『立命館高等教育研究』第16号，立命館大学　教育開発推進機構2016や山田礼子『学士過程教育の質的保障へむけて―学生調査と初年次教育からみえてきたもの―』東信堂2012が大変参考になった。

ⅲ）サミット配布冊子のグループワーク名簿より筆者が算出した。

ⅳ）大学の機関紙に教員紹介をするコーナーがあるとのこと。「リレー」と名がつくのは，紹介された教員が次の紹介教員を選ぶため。

ⅴ）サミット配布冊子のグループワーク名簿より筆者が算出した。

参考文献

斎藤憲司「学生相談を通じた総合的な学生支援体制の構築―実践と理念の循環から―」『大学と学生』平成23年２月号，日本学生支援機構，2011

木野茂『大学を変える，学生が変える―学生FDガイドブック』ナカニシヤ出版，2012

沖裕貴「「学生参画型FD（学生FD活動）」の理念整理について―「学生FDスタッフ」を正しく理解するために―」『中部大学教育研究』第13号，中部大学　大学教育研究センター2013

木野茂「学生主体の教育改善活動「学生FD」」『立命館高等教育研究』第16号，立命館大学　教育開発推進機構2016

「大学における学生生活の充実方策について（報告）―学生の立場に立った大学づくりを目指して―」文部科学省ホームページ，2000
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/012/toushin/000601.htm

「学士課程教育の構築に向けて（審議まとめ）」文部科学省ホームページ，2008
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/080410.htm

【資料】分科セッション「教室内での学び」のグループワーク発表にて挙げられた意見の一覧

調査協力：倉本和輝，遠藤幹人

・学生が質問のために教員の研究室を訪ねる（mailでも可）
・あだ名で呼ぶ
・ご飯を一緒に食べに行く
・学生主導でバーベキューをする
・イベントを一緒に計画し行なう
・授業にディスカッションを多く取り入れる
・一緒に本を作る
・教職員の会議に学生が出席する
・学生会が授業に対する意見を言えるようにする
・授業アンケートを行なう
・SNSでの交流（LINEなども含む）
・挨拶運動を行う
・運動会を開きともに汗を流す
・学生と教員が一つの課題について話し合う
・イベント（しゃべり場・オープンキャンパス）を設ける
・教室の隣に研究室を作る（高校の理科室と理科実験室のようなイメージ）
・教員紹介をリレー形式で行い，冊子にする
・月に一度程度のミーティングを行なう
・合コンをする
・教員と学生でシェアハウスをする
・オフィスタワーの開放をし，訪問の機会をつくる
・椅子・机を動かしやすいものにする（アクティブラーニングしやすくする）
・同じ気持ちで授業をする
・アドバイザーやSAといった仲介人に，間に入ってもらう
・研究所でお茶・寝泊りできるようにする（こたつがある研究室が存在するらしい）
・授業を少人数制にする
・とにかくノリよくフレンドリーに接し合う
・授業後に交流会を開く